

解説

序文 2013年公開シンポジウム「30年後の光合成研究」開催によせて*

東京大学 大学院総合文化研究科

佐藤 直樹*

第4回年会に伴う公開シンポジウムは、表記のタイトルで行われた。オーガナイザーは、会長の田中歩氏と事務局長の鹿内利治氏に加えて私となっていたが、実質的なアレンジは会長がして下さり、私の方は所用で一日目も欠席ということで、二日目の司会をつとめることになった。

シンポジウムの最初に、このタイトルは、ひょっとしたら私が昨年刊行した『40年後の「偶然と必然」』という本のタイトルに関係するのかもしれないという話をさせていただいた。40年前にモノーが書いた『偶然と必然』は、多くの人が読んだのだが、本当に著者が書きたかったことを、どれだけの人が受け取っただろうか。分子生物学を実存主義に結びつけ、人類の新しい社会像を提案した著者の想いは、少なくとも大部分の日本人読者には届かなかった。しかし、社会の問題は、当時も今も変わらない。どうしたら、次の時代を少しでもよりよく生きていけるのだろうか、という重たい課題を私たちも背負っている。こんなことを私は拙著の中で書きつづった。そこで、これから先の光合成は、学術的にはどのように発展し、社会の期待にどのように応えて行くことができるのだろうかということを、過去を振り返りながら考えるのが、今回のシンポジウムである。

多くの研究者のキャリアーは、20歳過ぎから始まり60歳か65歳くらいまで続くので、あるテーマの研究がどのように進められたのかという「ことの顛末」を、一人の人間が経験として知ることのできる期間は、40年間くらいに限られている。大学院を終えて一人前の研究者となる時期から数えると、おそらく30年間の歴史を担ってきたということかもしれない。現在のシニア研究者たちは、自分たちが学生として研究をはじめた頃の知識状況や問題意識や研究機材がどんなもので、それが、この30年間にどの程度変容したのかということ、経験として把握している。途中で研究テーマや分野が変わった方も多いため、必ずしも、このことはあてはまらないのかもしれないが、特に光合成という分野に限ると、かなり同じ顔ぶれがいつまでもいるようにも思える（悪口ではありません）。

そもそも今回、会長がこのような企画を考えられたのも、シニアの研究者として、これまでを振り返ることで、今研究をスタートしたばかりの若い研究者に、自らの30年後の姿を思い描いてもらいたいと考えたからであろう。今の日本の社会は先が不透明で、一時的に景気回復の幻想をもつかもしいないが、地球資源は限られていて、日本だけが抜け駆けするわけにもいかないことを考えれば、「脱成長」が現実のものになってきており、少なくとも大発展するような未来はありえない。そうした社会にあって、決して豊かであったとはいえない時代に、日本の科学がどのように構築されてきたのか、その中で、個人個人の科学者は、どんな目標を掲げ、それをどのように実現しようとしてきたのかということに、若い研究者が少しだけ関心を持ってくれることを望む。どんな厳しい社会のなかでも、個人個人は、それぞれの人生の目的を達成すべく努力し続けて来たし、これからもそうであるに違いないからである。『偶然と必然』の冒頭に引用されているカミュの『シジフォスの神話』の一節は、そうしたことを訴えている。過去を少しだけ見据えると、おぼろげであっても、未来の自分像を想像することもできるだろう。そうして初めて、自分の研究人生の設計ができ、意欲をもってこれからの研究に臨むことができると期待したい。「少しだけ」と書いたのは、あくまでも、未来を志向するための触媒としてという意味である。

さて、みなさんはどんな未来を描くであろうか。もっとも、私にも未来を描く資格は残っている。田中会長はいかがですか！

* 解説特集「30年後の光合成研究」

* 連絡先 E-mail: naokisat@bio.c.u-tokyo.ac.jp